

紀南病院 研修医通信 Vol.139 2024年5月号

東京大学医学部附属病院 岩川舞香

スカイツリーが窓から見える大学病院の寮で、ひとりGoogle mapを開いて紀南病院の位置を確かめたとき、何よりも最初に熊野古道が視界に飛び込んだ。つい最近読んだ小説「風の古道」は、熊野古道をモデルにしているわけではなかったが、古道を「幽霊が通る道」と評している。25年生きてもお出見えなかった何かに巡り合えるという期待を抱きつつ、三重に初上陸した。私が1年少しい施設は言うなれば「洗練された環境」であり、伝統化したローカルルールは目を見張るほど綿密にマニュアル化されている。駒の核となるのは中堅の年代であり、もちろん診療の中で未知の領域も多いただろうが、基本的には今までの経験則でto the pointの診察アセスメントをこなしている。私が考える前に、気づいたら診療は終わっている。紀南病院に来ると、若手の先生方とともに、「内科診療フローチャート」という分厚い本を携えつつ総合診療的に幅広い疾患を診ていく。私は初めてここで自分がいかに医療を知らないか知る。知識面ももちろんだが、ICの中で患者さんとどう話せばうまく伝わるか、そういった技法もひどいものである。まだ知らないことに向き合うことは楽しいけれど、怖い気持ちもある。GW熊野古道に出向いたときも、何度か後ろを振り向きつつ歩みを進めていった。はやる気持ちで転びそうにはなったけれど、道中に温かい笑顔で道案内をしてくれるおばあさんと出会い、頂上から鮮やかな青と緑のコントラストを目に焼き付けることができた。専門医になったら、もっともっと未知の経験と向き合うかもしれない、それでもきっと私が気づいていないだけで、今まで経験を積んだ施設も、先人たちが作り上げた環境の集大成であり、これからも変化しうる。余裕がなくなって目の前しか見ないと、視界を覆うような長い草木と虫しかいない。そんな時間も大事だけれど、おばあさんのような存在に出会うことも大事だと分かったし、私が年をとったら、そんな存在にならなくてはいけない。指導医の川口先生、事務の津呂橋さん、皆様、本当にありがとうございます。

済生会松阪総合病院 研修医2年目 森谷領太

和歌山県立医科大学出身であり、新宮までは行った事があり、熊野、紀宝の存在は知ってはいましたが、来るのは初めてであり、研修を楽しみにしていました。紀南病院では初診外来や救急や見た患者様をそのまま持つことが多く、来院から退院までの状態を把握することが出来たのでとても勉強になりました。救急外来では済生会とは異なり、あまり時間に追われることがなく、一人一人にフォーカスした診察を行うことが出来、自分のやり方を見直す機会にもなりました。また、紀和診療所や神川診療所、離島の神島診療所での研修ではより患者様と近い距離で診療させていただき、地域における医師の存在の大きさを実感しました。特に神島では離限られた資源をいかに効率よく使って診療していくかといった観点から診療システムが構築されており、小泉先生の取り組みに非常に感銘を受けました。紀南病院では指導医として見て下さった平山先生を初めとする内科の先生方、メディカルの方々に非常に良くしていただき、一か月間という短い期間ではありましたが楽しく、実りのある研修をさせて頂くことが出来ました。ありがとうございました。



神島にて

静峡にて

